

## 君たちはどう生きるか

5月6日付で保護者・生徒のみなさんにお知らせしたように、臨時休業期間が5月31日まで延長されることになりました。目に見えない新型コロナウイルスとの戦いが続いており、出口の見えない状況に対して、社会全体のフラストレーション（欲求不満）が高まっていますね。こんな時こそ、一人ひとりがどのように生きるのか、人間の心構えみたいなものが試されます。そんな状況をふまえて、今回は生徒のみなさんへ私からのメッセージを送ります。

「情報」のように高校で新しく始まる教科もありますが、中学まであって高校からなくなる教科もあります。「道徳」がそうです。高校では時間割の中には道徳はありませんが、公民科をはじめとした各教科の学習、総合的な探究の時間、特別活動などの学校教育全体で行うものとされています。道徳とか倫理を学ぶとは、平たく言えば「よく生きること・正しく生きること」を学ぶことだと思います。簡単なことではないですよ。

吉野源三郎さんの書いた「君たちはどう生きるか」という本があります。原著は1937（昭和12）年に出版されたものですが、第2次世界大戦が終わってから、著者自身によって何度か改訂されて出版され、私がよく授業で使っていた岩波文庫版は、吉野さんが亡くなった後の1982年発行のものでした。この本については、3年ほど前に漫画として出版されてベストセラーになったことでも知られています（作画は羽賀翔一さん、マガジンハウス社、2017年）。古い時代設定なのに、普遍的なテーマを扱っているからかでしょうか、漫画としても広く世間に受け入れられました。

さて、他にも道徳を学ぶ本はたくさんありますが、私は池田晶子さんの「14歳の君へ」（毎日新聞出版、2006年）を推薦します。池田さんはこの本を出版した翌年に、惜しくも病気で亡くなりました。もともと「毎日中学生新聞」に掲載されていた文章ですから、とても読みやすく、でもいろいろ考えさせられる内容です。いじめ問題に関連して「よい人のよい心を、悪い人の悪い心が傷つけることは、決してできないことなんだ。だから、よい心でいることが、一番強いことなんだ。」などと書いてあります。素敵ですね。

ただ、道徳とか倫理とかいうと、どこことなく正面から向き合いにくい感じがあります。でも正しく生きるために判断をしなければならぬ場面というのは、結構身近にあります。そんなことに気づかせてくれるのが、マイケル・サンデル「ハーバード白熱教室講義録」（早川書房、2010年）です。NHKでも実際の講義の様子が特集で放映されたりしました。学生とやりとりしながら進む講義は、息をつくことができないくらい切迫感があって、現代の倫理的課題に政治はどう答えるべきかを考えさせられました。

実はこの本の内容に関連して、最近考えたことがあります。それは、新型コロナウイルスに感染して重症化した人に使うエクモという人工呼吸器がありますが、それが患者数に比べて不足しているという状況下で、たとえば「1台しかエクモがないのに、重症患者が二人いて、一人は70歳、もう一人は10歳というときに、どちらの患者に装着すべきか」という倫理的問題です（一部の国ではすでに問題になっているそうです）。みなさんならどう考えますか？

道徳の学習は、たんに自分一人が正しく生きることだけを考える学習ではありません。どん

な社会をつくっていったらいいのか、これまでに経験したことのない危機的場面でもより正しい判断するためには、ふだんからどんな思考のトレーニングをしていたらいいのか、そんなことも学ぶ時間です。

私たちは今、これまで経験したことのないような社会状況に直面しています。私も不安なことはたくさんあります。いろいろなことを決めなくてはならない場面で、悩み苦しむことが多く、決めたあとも本当に正しかったのかと不安になることもたびたびです。でも、NO.19 で書いた恩師のようにユーモアのセンスを常に忘れず、NO.20 で書いたように情報を集めそれを整理して分析することを怠らなければ、きっと正しい判断ができると思っています。

この1か月を一人ひとりがどう過ごすかが、感染拡大の終息のために大切であると言われてます。まさに、「君たちはどう生きるか」試されているのです。